

鳥

三条万里子

目次

作品Ⅱ心のかたち	6
魂―スピリット	8
草萌ゆる	10
ひいふう みいよう	11
散りゆくさくら	14
からだ	16
今日も新しいスタートにつく	22
希い	25
表面張力	28
作品をつくる	30
水引草	32

旋律	34
鳥の歌	36
その時 見たものは	38
作品「鳥」	40
舞台	42
一人で踊った！	45
一瞬の破れ	48
剥製	50
翔ぶ―あとがき	54

作品Ⅱ心のかたち

瞬時に揺らぎ立つ人の魂が

こちらの胸に像を結ぶ。

作家の精神の波動が

心の動きを色彩や線、彫刻、建築に、文章に。

作者の内奥に潜むものが、真に形になった作品は

なんどでも見たいと思ひ

なんど読んでも感銘を受ける。

作品と呼べるものには犯しがたい品格と

秘められた迫力がある。

私には 特に耳に響く音楽。

時と体を：変貌させられる。

この珠玉のような業^{わざ}は

人の潜在的な精神と意識的な技から生まれる。

時を：失う。

不覚にも陥るそのものにこそ

めぐり逢いたい！

浸っていたい！

眼にも見えず耳にも聴こえないものの中にある、一種独特な気配。
瞬間に訪れる、あるもの――。

人はふとした隙間から滑り込む、あるチャンスに恵まれる。これは
通りすがりのふとした瞬間でも受け取れる。

また、すべてを捧げようとする特殊な舞台上の感覚は今でも引き継
がれ、自分が演じて、演じずに観客の一人であつても受け取れる。

人の心の奥にあるものは計り知れない。

それが魂の動きなのであろうか。

草蒨ゆる

わけ入ってもわけ入っても 青い山

うしろ姿が しぐれていく

落ち着いて死ねそうな 草蒨ゆる

― たねださんとうか
種田山頭火

自然の中での人の言葉ゝ生涯の中で瞬間に立ち上がる言葉ゝ

表現も揺れ動いている。軽さも明るさも、そして暗さも含まれている
日本語の世界。そんな表現を動きで現せたら…と思うことしきり…。

ひい　ふう　みい　よう

裏をみせ　表をみせて　散るもみじ

― 良寛

こんなに短い言葉からも大きな指針を受けられる。

先達の言葉Ⅱ 日本語は深い。

和歌、短歌に残された多くの言葉。その品格の香り高さは、とても私には手が届かないが。形容詞の多さからも、日本語の持つ感情、情

緒の微妙さに気付かされる。

その精神が、芸術・芸能・発明・技術に大きな力を添えて、次の創造に広がる。心のきざし（機微）に触れ、特に小さい秘められた何か…。

それがこちらの体の中で広がり満たされる。

何ものにも代えられない精神の糧^{かて}。

京都の^{とがのお}梅尾の高山寺を四、五回ほど訪れた。それは桜の木に手紙を書いた、という修行に厳しい^{みょうえしようにん}明恵上人を好きだったから…。

「ひい　ふう　みい　よう…」

逢ったこともない良寛様と、まりつきをした妄想も度々繰り返す。

散りゆく さくら

草花は花粉を虫、蝶、鳥にゆだねる。光と闇と風雨の中に生きて、そして時が熟せば、己^{おのれ}の実と種を我が身から空間に弾き飛ばして土に返す。そして自分も土に、還る。そんな自然の姿を尊び―身を浸しての詩歌が日本には沢山残されている。

散るさくら 残るさくらも 散るさくら

―良寛

人の動作は、草花のように移ろう危ういバランスがよく似合う。

力強い堂々としたバランス 華やかな健全な美があるからこそ、時
と空間の変化ももっと敏感に心に沁みる。

からだ

子どもの頃から目に触れるすべてが不思議だった。

「痛い！」という不都合さは、実に切実で、虫歯、腹痛、注射！ 大変に健康だった私は、いつもうらうらして上機嫌だったが……。しかし不思議でたまらなかったのは、鏡に近づいて自分の目玉を見たとき、驚いて泣いた。こればかりは親たちも解決は不可能。

アセチレンの燃える匂い——今でもイヤなもの代表で、何故か大蛇

の死体を連想した。怖いものは多くあり、とても書ききれない。

いまだに怖いものは闇

見えない怖さは体圧が下がる。たちまちに聴き耳をたて、一気に妄想が躍り出る。空気も薄くなり、息苦しい。

子どもや老人、そして不具の人に出会ったりすると、足の裏から痛さが駆け上り、背中が寒く狂人に出逢えば熱くなる。それらも不意をつかれると、もっと怖い！

どうしてこういうことが世の中にあるのだろうか、神様はいるの？と。

現実の内と外のズレ、予測と希望の測れなさ、劣等感とその裏返し。
人間はなんとめんどくさいシロモノ…と思っていた私に、いきなり
切羽詰まったセックスの体験。我が身が保てなかった。どんな言葉を
用いたらよいか…。

なんという世界！

時間の中に存在する「詩」や「音楽」、「絵画」と「建築」は空間

の中に。しかし、「舞踊」のみが時間と空間の中で同時に生きる。創造物も作家も、表現と行動で一体となつて浸透しあえる、そう思った。

その時、その瞬間に舞踊の本質、その衝動の根本は生きている人間の性の問題だ！と思った。

概念の舞踊ではなく、生きている証あかしの時間に立ち合えるのは、やはり「自分を舞台の上で試す以外の方法はない」と信じた。

それは観客にとつても、観るという行為によつて昇化しうる意識の

建造物であろうから。たとえ一時的にせよ、その世界に偏在し得る。その位置に観客共々、自分も行けるのではないか。

ただの夢は見せものにすることはできない。あらゆることを再現することも不可能。その時々命しかないのだから……。子どもの時のように、すつぽりと宇宙のリズムに合わせて踊れるように、と希う。

不思議なメカニズムは追いかけても捕まらず、「当たって砕ける」の勇氣だけは持ち続けたい！と希う。

今日も新しいスタートにつく

世界中に散りばめられた「美」のかたち^{フオーム}。

その様々が時の狭間^{はざま}からこちらの体に届けられる。

偶然の顔をしながら近づいてくるそれは、

私にとってすべて必然だと思った。

自分が自分でなく、他が他でない。

特に「DANCE」の基は「性」であることを悟った。

時空・能動性・共鳴作用

死に裏打ちされた生の輝き！

この自己充足！

常に問い直す運動のエロスとタナトス

この奇跡ミラクルとしか思えないような感覚には、心情、官能まで異変がおこる。しかし、結定的に現実の持続の体験はつづく。それは私の場合、「妊娠」と「出産」にあった。

「ア・ー・ツの真髄も人生を生きる以外には教われない」ことを知る。

社会通念も大切だ。しかし、はるかに大切な内的秩序を自分の方
法として作り、あらゆる可能性を引き起こし、適確な行動に反映さ
せたい。

常にスマートに！

今日も新しいスタートにつく。

希い

肉体に及ぼす本当のトレーニングを、私は欲しかった。

三十歳の半ば、我が身に起こった妊娠と出産。続けて生まれた二人の子供の成長と過程。人の世にあつては、子供が生まれることも、育つことも当たり前のことかもしれないが、自分と言うものの観念を根本から変えさせられ、奇跡のような事件だった。踊る筋肉と脳のすべてを取り替えるような再・出・発のき・つ・か・けになった。

俄に、私にとってのトレーニングの道が開けた。

子供の成長の不思議を感じながら、我が身を実験台にした。外に向けていた眼を体の内側に向け、人の体の行動を探ることが始まった。

先達の遺産Ⅱ瞑想とヨーガを再び、正面から取り組んだ。日本人の体を持つ私であれば、東洋思想に憧れるのは当然で、幼い頃からの環境でもあろうか。また、西洋のリズムより呼吸（息）のタイミングで動くことが私には合っていた。

古来より延々と一個ずつの体が探し求め、試してきたであろう
“作法は一つ”。

己の体の機能と心のバランスを自然の“氣”と調和できる体を目指すこと。体の快適な充実感はあることの自信になり、ものを生産する意欲に繋がる。

Ⅱ 閃^{ひらめ}きを感じ取りその直感を掴み取れるⅡ体を用意、それが私の
トレーニング法である。

表面張力

こぼれ落ちる寸前の形容し難い感覚。容器に注いだ水が、溢れる寸前、表面に盛り上がりこぼれるのを堪える「表面張力」。感情のエネルギーも、人の生理にも「表面張力」がある。

「エネルギーを抑え込む」

「情動が溢れるのを待つ」

「控える」

「しのぶ」

「押しとどめる」

ことの大切さは、日本人の特質であること。

直^{じか}にはつきりと認識したのは、ニューヨークだった。

作品をつくる

コンサートダンサーの道を選び、たった一人になり、糸の切れた
カイト 風同然。全く自己流で「当たって砕けろ！」とばかり舞台にも突き
進んだ。紆余曲折しながらも作品を作り、舞台に乗せてみなければ
判らない。出来てもできなくても、試す以外にない。失敗したらや
り直す。

当然のように「群舞作品」と「ソロ作品」とは、創りたいときと踊

りたいときの季節が明確にずれた。それはまるで潮の満ち干のよう
に。

そのことが、私を全・く・自・由・に・し・た。

水 引 草

そういう言葉でいえないものがあるのだ

そういう考えに乗らないものがあるのだ

そういう色で出せないものがあるのだ

そういう見方で描けないものがあるのだ

そういう道とはまるで違った道があるのだ

そういう図形にまるで嵌まらない図形があるのだ

そういうものがこの空間に充滿するのだ

そういうものが微塵の中にも激動するのだ

そういうものだけがいやでも己を動かすのだ

そういうものだけがこの水引草に紅い点々をうつのだ

—『激動するもの』 高村光太郎

この詩人の、人を動かす何ものかを語るこの言葉—水・引・草。

生気を甦らす息吹のこうした感情を、そのまま放置しておくわけには
いかない。それを形に置き変えたい！

私の“ソロ作品”は、水・引・草の紅い点々にしたい！

旋律

ユダヤ教会Ⅱシナゴークで魅せられたのは、民族の声^{voice}だった。歌曲の前身と思われる祈りの言葉。をカンターがたった一人、孤身で謳う。佛教ならば「声明」や「真言」である。響き渡る音の倍音と、精錬された旋律に心と体が一つになり、異次元に移る―民族の血が結晶した声は、私を彼方^{かなた}に誘^{いざな}った。

ジブシー音楽や、カンテフラメンコもその流れであろうか。遠い

昔、スペインにも住み着いたと云われる「セファルディ」系のユダヤ人―彼等の思いが残されたであろう、スペインの古謡こようの美しさ：

カタロニア地方に残された旋律「鳥の歌」。

パブロ・カザルス(1876-1973)の演奏を聴いた時、度々、耳にしていたシナゴークのあの音と重なった。

鳥の歌

一九七五年の初夏。二人の子供を連れて東京に着いた日の夕暮れ。
待ちきれず買ったばかりの曲をかけた。音が体に染み込むと同時に、
そこで踊る私の姿が、はつきりと見えた。驚き、すぐに曲をかけ直
す。新しい感動が呼び起こす動きのフレーズが、三回とも同じで実
に鮮明だ！

信じられないこの出来事、何という体験か！

九六歳で世を去ったパブロ・カザルスが、アンコールには必ず弾いたと云われる彼の生まれ故郷のカタロニアの民謡「鳥の歌」である。

その時 見たものは

―真つ直ぐに立つ、坐る、伏す、這う、そして天を仰ぐ、かがむ―

「踊る」という要素ではない行為Ⅱ人の動作の原型だけ。曲と共に同じ動きを三回も繰り返した自分の姿をはつきり見せられた。

その時見たものは、時と空間の中で、ただただ、そこに居る自分を見た。三回繰り返し返した意味も納得。心の赴くままの動きでよいこ

とも知った。一日一日新しい体験をしながら、時のうつろう中で生きていく私たち――。

作品「鳥」

清々と透明でかすかにほろ苦さを含む、シンプルなこの短い曲を、繰り返しくりかえし聴きながら、私は内部から惹き起こされる、私の動きにめぐり逢った。

翔べても翔べなくても、翔ぼうとする意志。それを試すための時であるように、そこに身を置くことが大切だ！ と思った。

一九七五年の九月に、作品「鳥」はニューヨークで初演した。一度上演すると、続けていくつも舞台で踊るよう所望された。百人の小ホールから二千人のセントラルパーク、デラコルテ野外劇場まで、様々に異なる条件での「鳥」。

一回毎に新しい作品として生まれ変わった。

瞬間瞬間に、飛び散り、砕ける波動のようなものと、体がせめ闘ぎ合
った。

舞台

息をこらした人々の気配がしーんと、伝わってくる。

観客の視線を一つに集めた舞台の空間には

幕が開いた瞬間、気も転倒するばかりの澄んだ硬さが

ぴんと張りつめた。

眼を布で覆って闇に立った私は

皮膚が光を求めたのを知った。

徐々に舞台に明かりが入るのを皮膚が感知する。

俄に身边に広がる空間は

まるで万華鏡のただ中に体が置かれたかと思うほどの
錯乱を誘う。

全身が竦すくむような感覚に堪える。

やがて首筋や背筋が気になりはじめ

何かそそり立ってくる感じになると奮い立つ。

俄に食らいつきたいような衝動とともに

体の疼^{うず}きは動きの波紋になり
エコーのように呼び交^かいながら
倍速で広がり出す。

観客からのエネルギーを一身に浴び
受け止めきれない過剰な豊かさの中で
見えない何かに向かって
身も心も一直線に進んでいく。

一人で踊った！

たった一人で舞台に立つ。

身一つという切実さが迫り、その怖さ、それに堪える。

きつと、やってくる筈のものを待つ。

舞台という場の、何物にも替えられないその場。

その時、「捧げもの」とか

ときには「人身御供」のような錯覚を

起こす程に体が変貌してしまう。

通常の自分の見知った感覚や、意識の操作を狂わせると、
内的なものがめくりめいて噴き出る。

体のバランスを失いそうな危うさに慄く。

それはゾツとする程のスリルにも浸され

先程までの自分とは、はっきり離れている処に舞い上がれる。

繰り返すうちに

その自分をしっかりと見ている
自分にも気付く。

その刹那^{せつな}の味わいは

空間に同化してしまうのか

空間にさまよい

自由にまるで夢の中のように振舞える。

一瞬の破れ

はじめは、オリジナルの動きの型を自分に突きつけ、一定の動きに身を縛る。封じ込められた体。冷静に繰り返すその動きを見つめ、反復に堪える。

動く自分とそれを見る自分とのギリギリの均衡を保つ。その時、それこそ突然にめらめらとした衝動を伴って裂け目からこぼれてくるもの、それは考えてもいなかった素早さで立ち上がる新しい動き。

それを身振りと共に果たしてしまふ。

“一瞬の破れ……”

時のはからいで、フーツと走り込んで来るものに身を任すだけである。こんな体験をすると、次の舞台はもつと怖い。気力の充実と時を待つことに堪えなければならぬから。

もし出来るなら、もう一度……と何回も希い、「鳥」を踊り続けた。

剥はくせい
製

己の行動を、掛け替えなく試せる舞台という空間：
その場こそ、より切実に生きられた！
いかに振る舞うか、真新しい自分であるか否か
が問われる。

まさに切羽詰まった土壇場どたんばに追いやられたか
というか追いやった、というか。

反復の中で、主題は螺旋状に上昇して行く。

必然的な動きが溢れ出る。

シ・ラ・ケ・て失敗もあったが、多くは観客の力に押され

ほとんどは充足。

何とか時を過ごす。

「鳥」を踊る私が

半生の狂乱を決して悔いなくて繰り返し踊る

そのうちに剥製になる！とまで思った。

舞台の空間の不思議な、まさに異次元的なその場を

もう一度

もう一度

と何回も希い

一九九七年秋まで踊り続けて舞台を降りた。

なんと二十年余りも！

そしてすべての時は過ぎ去った！

翔ぶ―あとがき

時空を翔び、瞬時に消えてしまいう一回性の身体芸術。舞踊は、音楽と同じようにアクション行為が大気を通し、人の感覚に響いてその体を通して、生産物資は何も残されない。

その時、演技者の体内で生まれる想像力と創造的技術の濃密さが、過激に、実に烈しく要求される。見事に一回性に貫かれた営みである。これこそは、体に宿る高揚する精神の刻印。

私には、忘れられないいくつかの舞台がある。また決して心から消えることがない舞台を観た経験がある。

世の中にこれほど豊穡に包まれた感覚の悦びがあるだろうか！
善悪、正邪など微塵^{みじん}も寄せ付けないところに美の姿があることを。
そして生きている証があることを、悦びをもって受け止める。

—音楽・ダンスは魂 (Inos) の言葉—

三条万里子

二〇二五年四月

鳥

著 者 三条万里子 さんじょう・まりこ

製作者 さとう かよこ

発 行 二〇二五年四月

発行者 Mariko Sanjo Cavior [New York]

<https://marikosanjo.wixsite.com/sanjo>

参考文献 三条万里子著

『イカルスのように』21世紀BOX



TO READ MORE

『よだかの星のように』『足跡をたどる』
『一人のためのデュエット』『VOICE』『夢は枯野を…』

